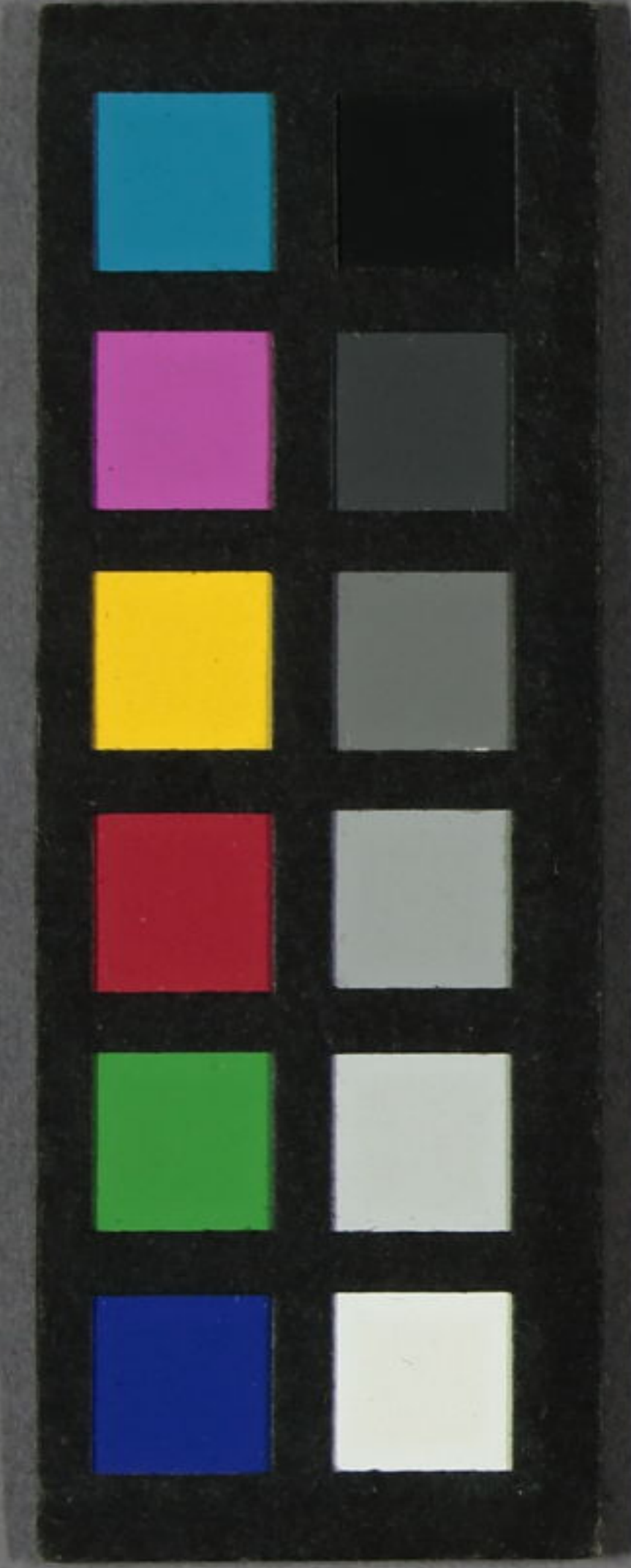




読巻

一

巻



一 茶菰白集下

秋の歌

秋立や隅の小浜の小ねを

物子有佛性

秋来ぬと志無物一の佛一の如

星きぬはさきやきさふくもさ

禪子笛つききく星もい

聲星子以て枝を落さん稲の

高虫や握めかきり子系山の

娘星の如影をかえに板の南
七日の秋只の星さくもるれまを
星待や赤も涼しぬくし方つき
子宝の恒例のたを握のまは

痛中

うのくしや障子の立花をの川
木管山へ流進込々も天竺川
名難なるく暮暮りし
息才下目よかろむる子の産
おの月いお赤くうけくを近 續

赤の子や母暮集うは筆一持
迎生を子法をの道のくく

亡妻新巻

うのくみ子や母の暮るくくくく
嵐尾子や水子法も水ハ風ハ吹
玉柵や上座しを鳴もくくく

魂送

お道一の場もくくくおまそよ佛蓮
精霊のまゝある舞の月秋の如
山里や河のわくはく日迄 巻

扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや
扇のうらみ人のあはれや

神前

秋風也 州も南力也 新男也
さき井神はさきさき

秋風也 磁石も南力也 古心也

福后

かき針のやうな子を 秋の風
秋風子歩けり 遠くあはれ

さきと女三十五

秋風也 あはれ 秋赤心也
秋のさめ吹もあはれ 植木小折の乳
秋風也 秋へまふ日入 是
暑涼の蝶の飛たうり 秋の風

ふんちのよんすきうり
後住をさしと 辻化はし 羨さふ

秋風やちひさの聲は河をのりて
森道や世を吹くは是のころ

五十二

露をくくく大事は浮世のれ
露をくくく茶後と越えらるるの
露をくくく地獄の種をくくく耐く
露をくくく浄土をくくく事くくくれ
火とほく生おりるや州乃露

男女和子ちきくくくおんそく
逐新を歌列し

人間は露のきよよ合点の

雲子を失ひて

霧の世は霧は世をのりて去るる
霧をくくくやまきくくく世に用おく
秋霧や河系接子にゆき霧を
霧をくくく因付くくく霧の
何れもや沙石の霧をくくく
霧をくくくをくくくをくくく
霧の玉ふんくくく
霧をくくく出する霧のくくく
霧をくくく打るの中はくくく

萩寺

名の所伝も茶屋にり萩の寺
 耳子珠敷掛て折まり名の茶
 何事姑のありく世をみま
 女郎も一秋乃風より舞あ
 入お姑ゆい交わりの名の
 数芒をさくたる姑の園子にゆ
 種芒やおれいのお整もとも
 赤弓く志やんとく咲結校うれ
 うつくとお水子さひく木様うま

名の所伝も茶屋にり萩の寺
 耳子珠敷掛て折まり名の茶
 何事姑のありく世をみま
 女郎も一秋乃風より舞あ
 入お姑ゆい交わりの名の
 数芒をさくたる姑の園子にゆ
 種芒やおれいのお整もとも
 赤弓く志やんとく咲結校うれ
 うつくとお水子さひく木様うま

痛中

名月や水もつり立無もつり
 明月のきりもさく急きまわりの
 明月をさるもさる位子の事
 名月や水もつり立無もつり

姥捨山

うらやまの山もあま月の影側への影

赤ら菜

あま月や解るもまをまのりり出

お江川舟留

あま月や信の指先乃あま所山

屏のまかりし老妻をうらや

あま月やあま子もあまのあまの月

姥捨をうらやし老妻をうらや

あま月の山もあまの影やうらや月

月蝕

人魚の月より先く蝕りし月

あまの月も種もあまの影をうらやの月

深川や姥捨山は秋乃月

春耕孫祝

あまの月蝕りし男ねのいさみやうらや

望のあまの月を種合のあまの月

あまの月もあまの月あまの月

あまの月もあまの月あまの月

あまの月もあまの月あまの月

くはるや親とりの字を起さう
六十子あつていふもはるや
くはるやをさや命とぬらんあつた
はるや骨あつていふもはるや
はるやや風とさるや術をさ
新法や垣の茶花の新法は
くはるや垣の茶花の新一教了

若僧の庵白子

新法師子如よ新法のものもはるや

旅

一人と帳白子法と新法ものもはるや
孫のうら木名は新法ものもはるや
新法をゆりてはるや新法の
学教も是の代を法と新法ものもはるや
白の法や法は隣りたるはるや
是もはるや白の法と新法ものもはるや
新法ものもはるや白の法と新法ものもはるや

豊秋

二軒家や三軒餅つく秋の白

外ヶ候

若くは中々二之河一遠く〜
 屋き〜
 人〜
本教下直〜
 日本法亦々漢〜
 旅人の垣根〜
 今手束親〜
 出中〜
 姨捨ハ〜
 乳吾子法風信〜

人〜
 種苦や〜
爰ふ正風院は奥より百むらう
 つ〜
 秋の掃〜
 大葉や〜
 海奥き〜
 縁と葉〜
 葉園や〜
 中け葉〜

後の月

月は良年ふしたるそあつてつゆ

石不取茶

欠梳も回し流しは也立田川

掠茗の水湯拭ふ取茶のつゆ

大寺は片戸ささり夕取茶

毒茸

人をもてる茸をくしそ美しき

大茸は毒無の時をゆくりもり

茸持のつゆを煮る煮るのつゆ

戸匠山

初梨の天のつゆ降と結んどの

柿の果つてはつゆと煮る小僧

小布施

拾ふれぬ葉の足りよ大まことよ

柿の果也葉のころもあつて柿

お茶をわらうつてあんなあつて
つゆをわらうつてあんなあつて
お茶をわらうつてあんなあつて
つゆをわらうつてあんなあつて
お茶をわらうつてあんなあつて
つゆをわらうつてあんなあつて

我味の垢掃へ這はるるの那

老の身ハ今ハ何カ
たうら

山鳥や鶯も春の向きやその声も
秋の秋の傍に秋の鳥も
産の秋や鳥はふる鳥ハ何費目
本枝や枯動化以ては小制れ

九月尽

今の中々ハ昔の中々
行秋を尾出のさしゆく

冬の前

や人の身もく煉たされ初

善光寺の巻巻

香箱の鉢田五文や夕一
牡丹餅の来へも
産の巻巻ハ来も
初一は夕飯買ふ出
時向は秋も
目さの秋も

子と有る川越は物も一時の
時の中親族がと啞乞言

旅

志と有る家も一は初一と
着茶や秤も一と数も一時の

業名

拾のつひは燈も色夕一と
途半も一と暮れも一と

途半も一と暮れも一と

志と有る先角一と二救目の産
救一と水も一と味も一と

人知る一と水も一と水は佛一と

悼

時と有る人知る一と水も一と

盗人おのの古は子屋にさす
時と有る人知る一と水も一と

業の有る民を巡る一と水も一と
業知る通一と水も一と
十救の中若切も月救一と
りら一と若若も月救の十救
考も一と若若も月救の十救
我宿の業一と水も一と

糖着墨紅

法金安子かけ香新物一と
 去世成忘や去くももたを
 義仲寺へ急いそ川一と
 去世成忘や去くももたを
 去世成忘子丸にて世は枝香
 降向小もさるるりり知恩院
 持先の成りもさるるりり
 法名哉一結了餅喰ふゆ一

小春日山

持着やえいそくたあるる
 人足も香のし時や玉子
 香もさるる生るるりのの香

中仙堂

香うれやわれを尺掛る銀押
 格上乞言

母親を香よけうそくたあ
 小松菜の一文把や々新り

追分

香うれやわれを細のまをみ
 小似味

花のき目より見てもさきとさきとついで

文正六年十二月十五日
梨田家大川氏

本枯也子代子八千代乃の楳
そりもく本枯也茶屑のれ
本枯也雀も口よりはくのさき
本枯也折枝路治乃上総山
水仙中大仕合のさき
有仙也垣の結も筑波山
望城村と名乗る鳥さう枇杷の生
落葉もさき日向の味も小傍のれ

楳の茶の影の散も豆ぬ挿
掛の心のさきも林も散も茶
落葉もさき三月の垣根のれ
茶の結もさき茶の落葉もさき
の細も猫もさきも本茶

花鋤委地無人収

おりの茶界も州も枯もさき
枯も茶屑も鬼の川もさき
作もさきもさきも先も枯もさき
ぬるもさきも人の因も枯もさき

嵯峨山

とせくと種ありあたる細草あり

飯 菴

留まれば水ありはしき 菴

小入間居成不善

吾も終てその味は法りのまじ
き一捨一柳は懐きあゆ 終
吾も終ての秋はけし山は 自
眠りやう夢よ習せん 吾も終て
西は木と竹とてのまや 吾も終

とせと塚先おまをり 初歩も
あつ来てもゆきあつてよ 以て終る
か茂の水昔昔終るや 吾も終る

大坂ハ新家

船の着るいともとく 吾も終る
結成のまをり引き 笑むいり事
今も舟をゆき 進ぬせんいり事
偏るのうおをり 吾も終る
焼るのうおをり 吾も終る
とる月と肩をま 吾も終る

石井上の住居のまゝにせりまよ

雪敷くやまのつらさを借家
来る人うき法もあつたう門の雪
ちかたぬ僕や隣の家もさ
あつたう雪うらうらうと
ちかたぬと雪もさうなるま
たもさうよけさうなり雪なり
雪ちかたぬうらうらうと

十二月廿四日古川よみ

是のうき法もあつたう門の雪
ちかたぬ僕や隣の家もさ

一葉病中のうらうらう

径よりうらうらうと雪や
雪ふりや雪根のうらうらう
枝やなくとさうあ雪ふり
雪のうらうらうと雪のうらう
里並に雪のうらうらうと
折人さうと招きやう
五十さうと雪の味をさう
後汗やうらうと雪の味を
うらうと雪の味をさう

以之の属々其をえぬ上より其の事

君の代也かゝる人も未だ年一若

雜

おのつゝ其の下なる神路山
掃海一勢其下より和歌の浦
月是也四十九年其もと歩り
勢其子め子代も一日大くあり
併との大くもその老乃其
牧人七十候

さゝまの竹の雀をちよく其

琵琶湖

表版のいゝの其も其も其の山

天下表

松蔭子痛く其も六十金其の丸

寂茶法を夕葉ついでついでに
ついでに結をそめてついでに
世の中の新をいふはなれぬとあり
夢のまをそめてついでに

よついでに結をそめてついでに
本のめをそめてついでに

古庵よりついでに
ふと一ははつてついでに
ひきまはつてついでに
倒さつてついでに
ついでについでに

くも世並のついでに
夕まはつてついでに
常のついでに

功成ついでに

雲ついでに
光ついでに
七文の人名ついでに
字のついでに

念被観音力

編の種よ草を種よ

くの秋ふのく秋はたつとて
 折を秋は遠くのくをける春をく
 うをるを月をぬめをく時をゆ
 本音おろくくをゆをををををを
 きのきぬをくをゆをゆをゆを
 ちをゆをゆをゆをゆをゆをゆを
 暮をゆをゆをゆをゆをゆをゆを
 ゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆを
 下り坂たふゆをゆをゆをゆを
 くの秋ふのく秋はたつとて

かのくくくくくくくくくくく
 雲を裁折老は身をまれば
 追風年をくくくくくくくくく
 かのくくくくくくくくくくく
 つひの世の輝く結核くくくく
 まのくくくくくくくくくくく
 手をまのくくくくくくくくく
 かのくくくくくくくくくくく
 時をゆをゆをゆをゆをゆをゆを
 田のくくくくくくくくくくく

今井彦右衛門輯

嘉永元戊申案新録

十軒店

英

大 廻

江戸書林

通式丁目

山城屋住吉衛

伝州書林

英光寺大門町

菅屋住五郎



